

広島キリスト教青年会 委員長 中尾 一真の手記より

8月6日 その日

あのと、私は広島市の東端、向洋の東洋工業株式会社（現マツダ株式会社）の勤労部の事務室にいた。従業員八千、勤労働員学徒二千を擁する工場の教育主任として、自分の机についていた。

真夏の快晴の朝だった。8時15分頃、突如、写真を撮るときのマグネシウムか、閃光電球の光のような、そして、それよりも、何千万倍も強烈な閃光が空間を走った。

「その場待避！」私は反射的にそう叫んで机の下に身をかくした。閃光ののち、何秒くらいの間隔があったのか覚えていない。つぎに来たものは、はげしい風圧による、窓や扉のガラスの割れる音だった。続いて、女の子たちの悲鳴が聞こえた。私は机の下から身を起こした。福原という老社員が、顔を両手で押さえてうつむいている。指の間から血が流れている。ガラスの破片にやられたのだ。私は室内を見まわした。ほかに負傷者はないらしい。私は老人につきそって、会社の附属病院（現マツダ病院）へ出かけた。一步、部屋の外に踏み出し、顔を西に向けたとき、私の見たものは広島市の真上にもくもくと盛り上がっている巨大なきのこ状の雲のかたまりだった。私はふと、幼い日、日曜学校で開いた、旧約聖書、出エジプト記の、モーゼと彼に従うイスラエルの民を導いたといわれる、あの雲の柱の物語を思い出した。

病院への途中、あちらからも、こちらからも、頭をおさえ、顔をおさえ、腕から、脚から、血を流した人びとが集まってくるのを見た。私は急いで勤労部へ引き返し、高等師範（現広島大学教育学部）の上級学生20名を集めて、学徒中の負傷者の調査を依頼した。各校のつき添い教師と連絡をとった。

そして、ふたたび病院へ行ったとき、病院の状態はまったく一変してしまっていた。

空襲を受けた広島市民が、いちばん広い道を、東へ向かって避難するとき、最初に見出す医療機関が、この病院だった。すでに病院は火傷患者でいっぱいだった。

私は、「おじさん！なんとかして！」と、私に呼びかけた15～16歳の女学生の姿を忘れることができない。制服はボロボロに焼けこげ、ほとんど裸体に近く、頭髮は焼けちぢれ、顔の皮膚は焼けてめくれ、赤い肉が露出し、顔全体がブクブクに腫れていた。私は、ガーゼをつかんで、油にひたし、歯をくいしばって、無茶苦茶に塗ってやる他なかった。

私は少し前に、呉市の空襲の被害の状況を見ていた。そして、広島を見舞った今度の空襲は、今までのものとは異なっていること、しかも、恐ろしい被害であることが、だんだんとわかってきた。私はふたたび勤労部へ引き返して、集められるだけの女子従業員、女学生を集めて、看護のために病院へ送った。負傷者は、ぞくぞくとつめかけて来る。会社はこの人びとを収容するために、各食堂を開放した。寄宿舎も提供した。医薬品の全ストックはもちろん、機械油、潤滑油、布類、必要なあらゆる物の倉庫を開き、全員を動員して、救護に当たった。炊事場は、働く者と避難者のために握り飯をつくり、患者のために粥をつくった。会社は一大救護所と化した。

午前11時頃、私は、呉海軍の自動車を見つけて便乗を乞い、走行3キロ、広島駅の近くまで行ったが、すでにどの道も猛火にさまたげられて、市中へ入ることはできなかった。帰途、大州町の自宅へ寄った。建具類は吹き飛び、壁はくずれ、箆箆や戸棚や机は倒れ、部屋中ガラスの破片が散乱し、固い樫の木のテーブルにガラスが鋭く突きささっている。

十分に活動できるように、下着から上着まで全部着がえた。靴下も靴も登山用のものに履き替えた。



水筒も持った。やがて火はこの家をも包むかもしれない。私はしばらく周囲を見まわした。そして、隣家へ挨拶して、会社へ急いだ。会社は数日前から、市内鶴見町、鶴見橋西詰め附近の民家、186戸の疎開取り壊し作業を、県から命ぜられて、毎日作業隊を出していた。その日も、約200名の従業員が出動していたが、その負傷者が帰ってくる。どの食堂も患者で満員になり、親しい者の安否を気遣う従業員の近親や一般患者の家族がつめかけてきて、工場は混雑した。

やがて、その収容者の中から、死ぬ者が出だした。午後5時頃、会社附属の青年学校長大津氏が市内で重傷を負い、第5食堂に収容されていることを開いて見舞いに行った。もう人事不省だった。病院に運び込まれたときには、まだしっかりしていて、「私はあとでいい、重傷者を先にしてあげてください」と、手当ての順序を譲っていたという。その夜私は、宿直だった。工場防護団本部兼空襲被害対策本部の地下室にあって、2つのラジオ、4つの電話機、10人の伝令のなかに身を置いて徹夜でがんばった。夜中に空襲警報が発令された。朝の空襲で市内の中心地をやられたのだから、今度こそ工場地帯をねらわれるだろうと、覚悟をきめていたが、爆弾は落ちてこなかった。大津校長永眠の電話を受けて寄宿舎へ行った。舎監室にただ一人、さびしく遺骸は置かれてあった。寄宿舎を一巡して、負傷者を見舞った。たくさんの人びとが苦しんでおり、たくさんの人びとが死んでいる。私は言葉もなく、本部へ引き返した。

午後10時頃から11時頃にかけて、状況調査のため、各方面へ派遣していた若者たちが、つぎつぎに帰ってきて、その見聞を報告した。市中はほとんど全滅である。西は己斐方面、南は宇品方面、東は段原方面がわずかに火災をまぬがれているが家々は火に焼けており、猛火はさらに拡がりつつあるという。私は、その日1日、弁当を食べることを忘れていた。深夜、みんなが出はらった宿直室で、朝、家をつくつて持ってきた焦げたご飯を丸めた握り飯を食べながら、不覚にも泣いた。市中にある親しい人びとの運命を思い、とうてい生きてはいないだろうと思って、机の上、握り飯の上に、ポタポタ、涙を落とした。



被爆直後、中尾が見たであろう
広島市に立ち上るきのこ雲



戦前の東洋工業（現マツダ株式会社）



建物疎開の様子 東洋工業の社員も従事した

8月7日

午前三時頃、私は屋上の防空監視所へ登って行って、炎々として燃えている広島のを、いつまでも見つめていた。その時には、もう私の心は静かだった。澄んでいた。落ち着いていた。あとになって、なぜそうであったかを考えてみて、その理由として、次の四つをあげることができる。

第一、来たるべきものが来てしまったからである。前途にある間は不安であったが、直面して、その不安は解消してしまったからである。

第二、その渦中であって、自分のなすべき義務を果たしていたからである。

第三、泣けるだけ泣いたからである。

第四、これがいちばん主要な理由なのだが、これまで、私は一日本人として日本兵の惨虐行為を深く恥じていた。南京の虐殺も、マニラの暴行も、帰港兵の口を通じてほぼ想像していた。そして、世界の人びとの前に、顔を上げえないものを感じていた。

ところが今、私は、この老若男女無差別の徹底的大虐殺を眼のあたりに見たのである。かくして、私の良心は、彼らもまた、神の前に、われわれと同じレベルにあり、お互いに、詫び合い、許し合う同列にいることを感じたからである。このことは、私の良心を落ち着かせる悲しい事実だった。おびただしい生命の犠牲をともなった、冷厳な事実であった

8月7日午前6時、私は、会社の勤労部長・河村氏と二人で、市中へ入っていった。市の周辺はまだ燃えていたが、市中は焼けるだけのものはすべて焼けつくして、わずかに余燼(よじん)がくすぶっていた。広島駅前を過ぎて、泉邸の方へ行く橋を渡りかけて、私が見た最初の死骸は鳩のそれだった。白い鳩が、紫の翼を閉じて橋の上に落ちて死んでいた。何かを象徴するかのよう.....。

橋を渡って、市の中心部へ向かうにつれて、いたるところに死体があった。黒こげの死体、赤く焼けただれた死体、傷のない青い死体、傷だらけの無惨な死体、腕を半分もぎとられた死体、焼けた棒杭(ぼうくい)のような死体、はじめて見る者には、凄惨(せいさん)で眼をおおうものだったろうが、私は昨日からの経験で、もう相当鈍感になっていた。家も、樹も、視野をさえぎる物はほとんど焼け落ちてしまって、広島全体が一目で見わたせた。広島城がなくなっている。中国新聞社、福屋百貨店、文理科大学(現広島大学)等の建物の外部だけが、ポツンポツンとわずかに残っている。広島女学院の焼跡を過ぎた。米国メソジスト、ミッションによって建設された広島最古の女子教育機関である。復活祭に、降誕祭に、招かれて私は幾度かその講壇に立った。ミス・ゲーンズに招待されて晩餐のご馳走になったこともある。ミス・フィンチ、ミス・ジョンソン、ミス・アンダーソン、日本人教師はもちろんのこと、私はこの学校の教師のなかに、多くの先輩、多くの友人をもっている。その女学院がたくさんの乙女たち、教師たちの生命を道づれとして、完全に焼け失せてしまっている。幼稚園もない、女学校もない、専門学校もない、寄宿舎もない、ゲーンズ・ホールもない。何もない。

上流川町の河村氏の邸の焼跡に立った。その焼けくずれた壁土や瓦の堆積の下に、氏の末の子供さんの遺骨があるはずなのだ。昨日、夫人は上の子供さんを連れて、川を泳ぎ渡って、会社まで避難された。末の赤ちゃんは崩壊物の下敷になって、どうすることもできなかったのだ。私たちは焼跡を探して、小さな茶碗を見出し、それに防火水槽の水を汲んで、持っていたビスケットとともにその所とおぼしい所へ供えて寡黙、合掌した。いつも冗談ばかり言って一同を笑わせている河村氏の頬に涙が光っていた。西練兵場を通った。西練兵場、歩兵隊跡、陸軍病院跡、野砲隊跡にかけて、そのあたり一面、おびただしい死骸である。何千という死骸がころがっている。そして、あちこちの防空壕の中から、まだ生きている重傷者の悲痛な声がきこえてくる。

「助けてくれ!」「苦しい、殺してくれ!」「水をくれ、水!」「お母さん!」

2日程前に、多数の青年が軍に召集されて、各部隊は新しい兵で満員だった。その中には会社の青年学校で私が教えていた青年も幾人かまざっていた。それがみんなやられたのだ。のちに、その当日、偶然、郊外の自宅に帰っていて助かった一将校と知り合って、聞き知ったことだが、彼の所属部隊500名のうち、今生きているのは、彼ともう1人の2名だけだという。他の部隊も同じだろう。文字どおりの全滅である。

中央メソジスト教会の焼跡を見た。屋根も窓も焼け落ちて、塔と四囲の壁だけが残っている。広島でいちばん美しい教会だったが廃墟と化した。カトリック教会も、組合教会も焼け落ちてあとかたもない。中央郵便局の前、黒川病院の焼跡に立った。黒川博士は河村氏の親戚であり、会社の嘱託医だった。何一つ残っていない。後でわかったことだが、この辺りは原子爆弾爆発の中心地帯で、この辺一帯の住民は、田舎に疎開させていた学童だけを残して、みんな死んでしまっていたのだ。歩く道々、路傍に、焼けた電車の中に、防火水槽の中に、マンホールの底に、地下水道の中に、いたるところに死体があった。広島県立第一中学校（現広島県立国泰寺高校）の焼跡を歩き、河村氏の長男の遺骨を求めて、探しまわった。県下の秀才を選びすぐったこの学校の一年生がほとんど死んでしまったのだ。県女、市女、女学院、他の学校も同じである。二、三年生以上は勤労動員学徒として市周辺の工場へ出ていたが、1、2年生は学校に残るか、家屋疎開作業に出動して遭難し、14、15歳の少年少女が、おびただしく、群をなして死んでいった。

水泳池のかたわらに倒れていた少年の死体のゲートルについている名札が眼についた。会社の寄宿舎の舎監の食堂氏の長男である。知らせなくてはならない。トタン板で覆っておいてその場を離れた。赤十字病院が奇蹟的に残っていた。病院長を見舞おうと、われわれは入っていった。玄関も廊下も、足の踏み場もないほどに、まるで重なるように負傷者が寝かされている。その中にはすでに死体となったものもまざっている。

そのころ、昨日避難した者が引きかえし、市外の者が市内に入り込んで、子を、親を、妻を、夫を、兄弟を、姉妹を、友人を、探し求める者の数が増していた。火傷のため、塗り薬のため、繃帯のため、顔の形が変わってしまっているので、見ただけでは誰だかわからない。大声で名前を呼んで歩きまわるほかに方法がなかった。重傷者のうめき声、看護婦を呼ぶ声、水を欲しがると、高熱のうわごと、母を求める子供の声、そして愛する者を探しまわる人びとの呼び声、それに発狂した者の異様な叫び声がまざって、とうてい、聞くに耐えなかった。

広島文理科大学の学長を訪ねようと大学の構内に入ったと思うと、空襲警報が出た。二人は防空壕に避難し、昼前によく晴れた夏空を仰いだ。警報解除、校庭に1カ所水道栓がこわれて泉をなしていたので、物陰で弁当を食べた。文理大のすぐ北側に、フレーザー英語学校があった。米人フレーザー氏の寄附によって建てられ、カーブ氏夫妻、デマリー氏夫妻、ハカピー氏夫妻によって経営されてきた男子対象の教育機関で、教会と幼稚園をももっていた。私もかつて3年間、週に2回ずつそこで教えたことがある。最後の校長は田頭千代吉氏で、長く米国に学んだ日本有数の宗教教育の専門家、有能にして温厚な人格者だった。今、一物をも残さぬ廃墟と化している。あとで開けば、田頭氏一家は全滅して遺骨さえわからないという。その少し先に、長老教会の会堂と宣教師館があったが、焼野原になつて何も見えない。また、文理大の南側に、元バプテスト教会の宣教師館で、宣教師の帰国後、YMCAが借り受け、階上を学生の寄宿舎に、



元バプテスト教会の宣教師館 YMCA愛寮も無くなった。

階下を仮会館として使っていた建物があったが、これも今は跡かたもない。昼食後、われわれは校長の家族を探し出して、その最期を伝え、御幸橋を渡り皆実町を廻って会社へ帰った。

8月8日以降、その後の一週間

会社は、市内4カ所に、罹災者相談所を開設する計画をたて、翌朝から実行した。私は、中央部の相談所長として、数名の社員および高等師範（現広大教育学部）の学生と共に、文理科大学の一部を借りて、椅子と机を持参し、たくさんの罹災者に、食糧、衣服、履物、石鹸、タオルなどを贈り、今後どうするか相談相手になった。

そして、多くの人びとから、悲しい話を聞かされた。相談所開設の最初の晩、約束した迎いの自動車が来ないので、夜9時半から10時にかけて、5キロの道を会社まで歩いて帰った。遠近に死体を焼く炎が赤く、また、あちらこちらに埋葬された死体から発する燐火が燃えて、鬼哭啾々*（きこくしゅうしゅう）、言語に絶する凄さであった。

毎日、罹災者相談所へ通った。朝から晩まで、気の毒な人びとの相談相手になった。一度、席を離れて、市の西部、福島町まで行ってみたかった。そこには、私が数年働いて基礎をつくつたセツルメント・ハウスがあつた。鷹匠町へも行ってみたかった。そこにも私が手伝ったことのある隣保館があつた。その2つの町とその附近に、私はたくさんの知人をもっていた。1度行って彼らの安否を尋ねたかった。しかし、私は我慢して、真夏の焼跡の廃墟の中で、与えられた位置を守りつづけた。

重い、防火水槽をボイラー室へ持ち込み、水浴場を作り、石鹸を備えて、汗と垢にまみれている人びとを喜ばせたり、風通しのよい教室に、グランド・シートを敷いて、疲れきっている人びとに昼寝の場所を提供したりした。大学構内の防空壕の一つに、支那（中国）、フィリピン、ビルマ（ミャンマー）などからの学生の一団が避難して、自炊生活をしていたが、われわれは幾度が彼らに食糧を贈った。相談所生活一週間、疲労のためか、それとも、原子放射能の影響を受けたのか、嘔吐し、下痢し、発熱して、就床した。

※【鬼哭啾々* 靈魂がしくしくと泣くさまのこと】



1945年8月7日～8日にかけての広島市内の様子。火災の後、多くの煙が立ち込めている。

その1年後（1946年）

1946年8月6日、生き残った広島のカリクリト教徒は、中央教会の焼跡に信徒大会を開催し、私は一同を代表して、JOFK（現NHK広島放送ラジオ局）のマイクを通じて、大略つぎのような宣言を放送した。

- 一、我らは無力にして、戦争とその惨禍の防止にたいし、為すなかりしことを神と人との前に衷心より懺悔（ざんげ）する。
- 二、我らは、神は父、人はその子、人類はすべて兄弟なりとのカリクリトの教えを再確認し、死にいたるまでこの信仰に忠実ならんことを誓う。
- 三、我らは、衣食住すべてとぼしい今の世にあつて、あらゆる困難に打ち勝つて理想の世界を建設する道は、カリクリト教的兄弟愛の実践以外にないことを確信し、この実行と宣伝に最善をつくす。

その1年後（1947年）

1947年8月6日

今、私は一室にとじこもつて、この記録を綴っている。広島カリクリト教青年会（広島YMCA）の委員長として、同志と共に、原子爆弾体験者の手記を編集し、これを国内ならびに海外で出版する計画をたて、精神的には、世界平和に貢献し、物質的には、メモリアル・ホールとしての青年会館建設の資金を得ようと努力している。

その後私は、パール・バック女史が、原子爆弾使用の直後、トルーマン大統領に、はげしい抗議をされた話を、詳しく聞くことをえた。また今年の春、日本を訪問されたYMCA世界同盟総主事トレイシー・ストロング博士が、一米国人として、広島市民に会わせる顔がないと言って、広島訪問を拒まれたことを聞き、米国人の良心の健全なことを確めえた。

われわれは、今後、日本人の良心の確立のために、最善をつくさなくてはならない。

（可部労働基準監督署長、1976年逝去、享年70歳）



1945年11月に中尾をはじめとする生き残った数名の会員がYMCA活動を再開。1946年11月に現在の八丁堀の土地を取得。1949年、呉に駐屯していたオーストラリア軍より、蒲鉾型兵舎（コンセットハット）2棟を譲り受けることとなった。